特277-782
*76W10721 *
特277
782

組織問題に就て

著 レーニン
譯 竹尾丈

共生閣版

ムスク叢書第五册

始

レーニン著
竹尾弍譯
（レーニズム叢書第五册）

組織問題に就て

共生閣版
九二七年

昭和三年
帝國圖書館

序

一、本篇には『黨の再組織に就て』『カデート化しつつある社會民主々義との闘爭と黨の訓練』『一九〇七年に於けるペテルブルグの分派』『召還主義に抗して』の四篇を譯載した。

一、此等の諸篇は一九〇五年―一九〇八年――ボルシェヴィズムの歴史に於ける眞に受難の時代に於て、血を以て書かれたものである。若し此の時代に於て、レーニンが、容赦なき理論闘爭に依つて、危機に頻したボリシェヴィズムの陣營に、確乎たる行動の指針を與へなかつたならば、後に至つてボリシェヴィズムの演じたかの大いなる役割は完全には果され得なかつたであらう。

一、此の時代のレーニンの論文は、全く特殊な注意深い研究に値せねばならない。讀者は本篇に依りて我が國無産階級直接當面の問題に對する解決の大い

76W10721

なる暗示を得られるであらうことを譯者は信ずる。

一・本篇はエス・ゴプネル編纂のレーニン學敎科書の原本から直接譯したものである。

一九二七年九月下旬、全國に於ける縣議戰の漸くたけなはならうとする時

譯　者

目　次

一、黨の再組織に就て……(一)
一、カデート化しつゝある社會民主々義との鬪爭と黨の訓練……(二七)
一、一九〇七年に於けるペテルブルグの分派……(四一)
一、召還主義に抗して……(五一)

黨の再組織に就て

黨の再組織に就て

一、

我黨の行動上の條件は根本的に變化しつつある。集會結社、出版の自由は獲得された。だが、勿論、此等の權利は徹底的に確保されてゐると云ふ譯ではない。現在得てゐる自由に、信頼を置くが如きは、罪惡とは云はれずとも、狂氣の沙汰である。決定的闘爭は、未だこれから先の仕事だ。だから先づ何より先に此の闘爭への準備をせねばならないのだ。黨の地下的機關は尙保存されねばならない。だがそれと同時に、現在の比較的廣濶な自由を、最も廣く、利用することが絶對に必要である。地下的機關と並んで、色々の新しい、大つぴらな、

半ば大ッぴらな黨の(黨に合體すべき)組織を作ることが、絶對に必要なのだ。我々の行動を新條件に適應せしむると云ふ最後の仕事をせねば、新しい問題を解決し得るようになると云ふことは考へ得られない。

組織を新しい基礎の上に置くがためには、新しい黨の大會を開くことが必要である。黨規約に依れば大會は年一度、即ち一九〇六年五月に開かれることになつてゐるが、此の大會をもつと早く開くことが、今直ぐにも必要なことだ。若し我々にして、時機を捕へねば、勞働者の極度の叫びである組織の要求が、片輪な危險な形で鑄りつけられ、何か『獨立派』などの勢力を增長させると云ふ結果になる。その意味で、折角の時機を逃して了ふであらう。だから黨の組織を急がねばならないのである。新しい仕事のしかたを一般の審議にかけねばならないのだ。大膽に、斷乎として『新課程』を規定せねばならないのだ。

本號所載の、黨中央委員會の署名ある黨への公開狀は、此の新課程を規定す

るものであり、全く正しいものだと私は深く信じてゐる。ロシア社會民主々義の代表者にして『多數派』の擁護者である我々は、徹底した黨の民主化は、仕事を秘密にやると云ふ條件の下では、不可能であつたこと、この條件の下に於ける『選擧主義』は、單に空辭であると云ふことを屢言した。そして現實は、我々の言葉の正しさを證明した。事實直面目な民主化や、實際上の選擧には失敗したと云ふ意味を、少數派の昔の共鳴者達は再三文献(アクセリロッドの序文ある小冊子『勞働者』、『イスクラ』と小冊子『黨の分裂に關する勞働者』に所載の『多數よりの一人の勞働者』の手紙を見よ)上で述べた。然し新條件の下で、即ち政治的自由の獲得後、選擧主義に移向する必要を、我々ボリシェヴィキは常に認めてゐた。もつと證據を出せと云ふならロシア社會民主勞働黨第三回大會の報告書は特に確信を以て、此の事實を證據立ててゐる。

斯くして問題は明かとなつた。即ち地下的機關を當分その儘保存し、新しい

大つぴらな機關を發達させると云ふことである。大會に適用すれば此の問題は——これを具體的に實行する時には勿論、實踐上の心得や場所と時との一切の條件に關する知識が必要である——規約に基き第四回大會を招集すると同時に、躊躇せず直ちに選擧主義を適用することが必要になつて來ると云ふのである。中央委員會は此の問題を解決した。即ち小委員會は、形式上は全權的組織の代表者として、實際は黨の代表者として、權利に依り、票決權を以て大會に出席すると云ふのである。中央委員會は、自分の權利に基き、評議權を以て、一切の黨員から、從つて又黨に加盟せる勞働者の團體から、選擧された代表者を招集したのである。中央委員會は更に、大會に向つて、此の評議權の票決權への變更を提議すべき旨を宣明した。各委員會の全權代議員は、これに贊同するであらうか？

中央委員會は、勿論贊同すると云ふ意味の意見を述べてゐる。私も個人として、深く之を信じてゐる。斯かることには贊同せざるを得ない。社會民主々義的プロレタリアートの大部分が、之に贊同しないなどとは想像することが出來ない。我々は確信する、『ノーワヤ・ジーズニ』紙に依り、凡ゆる注意を以て登錄された黨鬪士の投票は、極めて速かに、我々の見解の正しきことを證明するであらう。斯かる一歩の爲の鬪爭（評議權を票決權にかへる爲の鬪爭）が終らないとしても、其の終ることは疑ひないことである。

此の問題を、他の方面から、形式上の觀點ではなしに、本質の方面から眺めて見よ。我々の提議した計畫の實現から、社會民主々義の危險が現はれて來るかどうか？

社會民主々義者でない大衆が黨へ、直接加盟するだらうと云ふ點に、危險が存在し得るかも知れぬ。その時黨は、大衆の中に溶解するであらう。黨は、階級の意識した前衛隊ではなくなるであらう。黨は、追隨主義者の役割まで下落

するであらう。そうなれば、此は勿論悲むべき時期である。若し、我々にデマゴーグを好むような傾向に直面し、黨としての基礎（網領、實踐上の規定、組織上の經驗）が全く缺如してゐるか、或は薄弱で、浮動してゐようものなら、斯かる危險は、疑もなく、重大なる意義を有し得るであらう。然し一切の問題は、この『でもあらう』が、丁度目前には存在してゐないのである。我々ボリシェウィキの間には、斯かるデマゴークへの傾向が存在してゐないばかりではない。それどころか我々は、常に、斷乎として、公然直接に、極く些細なデマゴークの試みとも闘爭を續けて來た。我々は、黨に加盟した人々の自覺を要求して來た。我々は黨を發達せしむる仕事に於ける連關性の偉大なる意義を强調して來た。一つの黨組織に於ける凡ゆる黨員の訓練と敎育を說いて來た。我々には儼然とした網領がある、それは一切の社會民主黨に依つて正式に承認されたもので、その根本的規定に於ては、何等本質的な批判を呼び起さなかつた程確然た

るものである（個々の點や定式化の批判に至つては——一切の活動してゐる黨としては、お定りな而も必要なことである）。我々には實踐上の決議、第二回と第三回の大會や社會民主々義の出版物で長年の間檢討され、首尾一貫して組織的に作成された決議がある。我々には或る組織上の經驗も實際上の組織も持つてゐる。それは敎育的の役割を演じ、直ぐには現はれないが、疑ひもなく好果を與へてゐる。此を否定し得るものがあるとすれば、それは盲目か盲目にされた者のみである。

否、同志諸君よ、我々は此の危險を誇張しないであらう。社會民主々義は、自分に附ける名前を創造した。我々の進むべき動向を創造した。勞働者の社會民主々義者の指導者を創造した。そして現在に於ては、英雄的なプロレタリアートが、闘爭への自己の準備を實踐に於て證明し、明瞭に意識された目的のために合同して頑强に、而も純粹な社會民主々義的精神に於て戰ひ得る自己の能力

を、實踐に於て證明したその時に――我黨に入黨し、中央委員會の勸誘で、明日我黨に入黨するであらう勞働者が、百人中九十九人迄は、社會民主々義者であると云ふことを疑ふなら、それは正に滑稽である。勞働者階級は、本能的に、自然生長的に社會民主的である。況んや社會民主々義の十年に亙る活動は、此の自然生長性を、目的意識に轉化せしむるため、既に極めて少なからざる仕事を成し遂げた。同志よ！　自分で恐怖の念を起してはならない。生々と、發達してゐる黨には、如何なる黨にも常に、不確乎と動搖と逡巡の要素のあることを忘れてはならない。然し此等の要素は、社會民主々義者の頑强に、結束した中心分子の作業に、克服されつつある。又克服されるであらう。

我黨は、長らく床下に蹋踏してゐた。第三回黨大會で一代議員が正しく表現した如く、黨は最近數年間床下で喘いでゐたのである。床下は壞されるだらう。より大膽に前方へ、新しい武器を取り、之を新しい人々に分け與へよ。自分の

足場を擴げ、凡ゆる勞働者の社會民主々義者を呼び寄せ、之を何百、何千と云ふ數で黨組織の中へ引き入れよ。彼等の代表者をして、我等の中心を活氣立たせ、彼等を經て、若き××ロシアの新鮮な精神を注入せしめよ。今日迄に於て、×××はマルキシズムの一切の基礎的な理論的原則、社會民主々義の一切の現存の合言葉の、正しさを證明した。そして××は、同じく、我々の社會民主々義の仕事の正しさを證明した。プロレタリアートの眞實の××性に對する我々の希望と信仰の正しさを證明した。黨の必要な改革に於ける一切の些事は之を放棄して、直ちに新しい道に向つて立とう。此は、我々から、舊來の××機關を取り去るものではない（勞働者の社會民主々義者は此の必要を認め、確認することは疑を容れぬ。それは、決議と規定が之を證し得たであらうよりも百倍も、皷吹的に××の現實と進行が之を證明した）。それは我々に、新しく若々しい力を、眞に唯一の××的な、最後迄××的な階級、既にロシアの爲に自由の半分を戰ひ取

り、現に完全なる自由を戰ひ取りつつ、自由から××主義へとロシアを導くであらうところの階級の、一番の核心から迸り出る力を我々に與へて呉れる！

二、

『ノーワヤ・ジーズニ』第九號所載、ロシア社會民主勞働黨第四回大會招集に關する黨中央委員會の決議は、黨組織内に於けるデマゴークの端初の完全なる實現への、決然たる一歩を踏み出したものである。大會代議員の（最初は評議權だけだが、やがては疑ひなく票決權を持つて表れる代議員）選擧は、一ケ月間に行はれねばならない。斯くして、黨の凡ゆる組織は、出來るだけ早く、代議員候補者の人となりや大會の議案に關する問題の審議を爲さねばならないのである。死滅しつつある專制政治が集會の自由を奪ひ、××的勞働者殊に彼等の指導者を彈壓せんとする新しい試みの可能性を、必ず我々は勘定に入れねば

ならない。それ故、（特別の例外を除き）代議員の本名を公表するのは全く當を得ない。黑白人組（反動團體）が蔓つてゐる中は、政治的奴隷の時代が我々に敎へて呉れた匿名の使用を、まだまだ止める譯には行かない。代議員の候補者を、再び從來の如く、舊式に『行き當りばつたりに』選擧することはさまたげにならないだらう。然し、我々は、此等一切の秘密的警戒に就ては詳論しないであらう。何故なら、仕事の場所とその條件に通じてゐる同志達は、この關係に於て起り得る一切の困難を容易に克服するであらうから。專制政治と云ふ條件の下で、××的な仕事の經驗を豐富に持つてゐる同志達は、新しい『自由な』（未だその自由は括孤附である）條件の下で社會民主的仕事を始めた凡ゆる人々に、自分の助言を與へ、以て彼等を援助せねばならない。この際我々委員會の委員が多くのタクトを持つことを要求されるのは、自ら勿論のことである。以前の形式的な特權は現在では不可避的に意義を失つてゐる。そして更に新しく、屢々『そ

の最初から』やり直すことが必要である。黨の新しい同志の廣汎な層に、强固な社會民主々義の綱領、戰術、組織の重要性を證明する必要がある。今日迄は、與へられた社會層から分離された革命家達とのみ仕事をして來たが、今度我々は大衆の典型的代表者と仕事をするのだと云ふことを忘れてはならない。此の變更は、宣傳、煽動の變化のみならず（より大きなボピュラリテーの必要、問題を取上げる能力、最も簡單な、直截な、本當に納得の行く方法で××主義の根本的眞理を解說する能力）組織の變更をも要求する。

本文に於ては、私は、新しい組織上の任務の一面にのみ止まりたいと思ふ。中央委員會の決議に依れば、大會代議員を、凡ゆる黨の組織から、招集し、凡ゆる勞働者の社會民主々義者に、斯かる組織への參加を、慫慂してゐる。此の結構な希望が、實際に遂げられるためには、單に勞働者を『招待する』のみでは不十分である。單に舊型の組織の數を增すのみでは不十分である。否、これが

爲には、凡ゆる同志が協力して、新しい組織形態を、獨立した創造的な考へを以て、作らねばならない。此處では、以前に規定された標準などを斷じて持ち出してはならない。何故なら、此の仕事は一切新しいのだから。此處では、各地方の條件と、重大な、凡ゆる黨員の、發意の智識を自分に見出さねばならない。新しい組織形態、もつと正確に云ふなら、勞働者黨の基礎的な組織細胞の新形態は、舊式な小團體（サークル）と比較して、勿論もつと廣汎なものでなければならない。この外、新しい細胞は、恐らく、形式は以前より嚴格でなく、その代りもつと『自由な』『ルーズ』な組織でなければならない。結社の完全なる自由、市民法の完全な保證があるようになれば、勿論我々は、至るところに社會民主的（單に職業的なものでなく、政治的な、黨の）同盟を作らねばならないであらう。現在の條件の下では、我々の處置し得る凡ゆる方法と手段を以て、此の目的に近づくため努力をせねばならない。

凡ゆる黨の闘士、及社會民主々義に同情する凡ゆる勞働者の發意を速かに喚起する必要がある。有りと凡ゆるところに、報告會、座談會、集會、ロシア社會民主勞働黨第四回大會の報告の爲の會合（マッソフカ）を組織せねばならない。其處では、此の大會の任務を最もポピュラーな會得し易い形式で説明し、大會の組織の新形態を指示し、新しい基礎の上に立つた、眞實なプロレタリアートの社會民主々義黨の構成へと社會民主々義者の一切を召集せねばならない。このような仕事は、大衆に經驗の指示を與へ、二三週間の中に（熱心に仕事を運んだならば）勞働者の間から、新しい社會民主々義的力を引き出し、極めて廣汎な層の間に、我々が今や一切の勞働者の同志と共に、改造を決心したかの社會民主的黨の興味を、振起せしむるであらう。同盟や組織や黨の團體の組織に關する問題が、凡ゆる集會に於て、速かに提起せらるゝであらう。各同盟や組織や團體は、直ぐにも事務局（ビュロー）か理事局か、事務委員會を選擧するであらう——一言にして述ぶれば、組

織の仕事を運ぶため、黨の地方機關との連絡のため、黨の文書を受理し廣布するため、黨の仕事に要する分擔費を集めるため、集會、講演會、報告會を開くため、最後に、大會代議員の選擧のために、恒常的な中央機關が設置されるであらう。黨の委員會は、勿論、斯かる組織の各に援助しようと考慮し、ロシア社會民主勞働黨とは如何なるものであるか、その歴史や現在の偉大なる任務は如何なるものであるかを知らしむるため材料を與へるであらう。

更に、今や、勞働者の社會民主々義者の、地方々々の經濟的な、所謂、支柱的な地點を創設すべき、黨員の維持に依る食堂、喫茶店、酒場、圖書室、文庫、射撃場等々（註）の形式で、組織を作るべき時が來たのだ。『專制的な』警察以外に、『專制的な』工場主も、煽動者の名前を數へ上げて、勞働者の社會民主々義者を追究するだらうと云ふことを忘れてはならない。それ故、工場主の自恣から出來るだけ獨立した基礎を作ることが——極めて重大なのである。

註、私は、これに相應するロシア語を知らない。それで、的に射的する場所、各種の銃器があつて、希望者は、小額の料金で、拳銃や小銃の射撃の出來るようになつてゐる場所を、チールと呼ぶことにする。ロシアでは、集會や同盟の自由が公布された。市民は、射撃の稽古に、集合する權利を持つてゐる。このために危險は何人にもある筈がない。何處でもヨーロッパの大都市には、建物の地下室や時には市外に、萬人に解放されたチールがある。そして勞働者が、射撃を習得し、武器を以て向ふことを學ぶのは、決して決して無駄なことではない。勿論、此の仕事に眞面目に、廣汎に携り得るのは、結社の自由が、保護され、大膽にも斯かる機關を閉鎖した、××の惡黨共を裁判に引きずり出すことが出來るようになつてからのことではある。

概して云へば、我々社會民主々義者は、凡ゆる方法で、今や擴大された行動の自由を、利用せねばならない。そして、此の自由がより多く保護されれば、される程、益々積極的に我々は、『人民の中』へと云ふ合言葉を、使用するであらう。今や勞働者自身の指導權(イニシアチブ)は、昨日の秘密行動者であり、『小團體員』であつた我々が、夢想だもし得なかつた程增大するであらう。今や、プロレタリア

ート大衆に對する社會主義思想の作用は、時には我々が全く追ひ附き得ないような道を辿つて進みつつある。又今後も進むであらう。此の條件に相應して、社會民主々義的インテリゲンチャ(註)をもつと正確に配分することを考慮せねばならない。それは運動が既に起つてゐるところではインテリゲンチャが、無暗に衝突せずに、斯うした表現が可能であるなら、自分の力で身をかはすために彼等の正確な配分が必要なのである。運動が困難で、條件が惡く、經驗と智識ある人々を極度に必要とし、光明の源泉が少く、政治生活が微々たるところでは、インテリゲンチャが『下に』沈潛するために、彼等の正確な配分が必要なのである。一切の人民、寒村辟地の人々さへも參加するであらう選擧に際し、そして(もつと重大なことは)彼のフランスのバンデェアにも比すべき田舍の反動的地方の反動性を痲痺せしむるため、又凡ゆる地方、プロレタリアートの凡ゆる大衆に、大中心地から出される合言葉を擴めることを保證するため、公然た

る闘爭に際し、我々は『人民の中』に行かねばならぬ。

勿論、極端は、如何なる場合でも有害である。仕事を全く强固に、出來るだけ『模範的』に提起するためには、尙屢々、今でも何處かの重要なる中心點に、より强い力を集中する必要が起つて來る。この際どんな割合を守るべきかを經驗は敎へてくれる。我々の任務は、今や、新しい基礎に於ける組織の爲に等級を考へると云ふことよりも、第四回大會に於ける黨の經驗の材料を、總計し定型づけるために最も廣汎な、最も勇敢な行動を展開することである。

註、第三回黨大會に於て、私は黨委員會に、インテリゲンチヤ二人に對し、勞働者八人の割合を適用すべきことを希望した。此の希望は、如何に古臭くなつたことか！

黨の新しい組織に於ては、社會民主々義的インテリゲンチヤの黨員一名に對し、社會民主々義的勞働者數百人の割合を希望せねばならない。

三、

前二章に於て我々は、黨の選擧主義の一般的意義、細胞と組織形態の新組織の必要を述べた。次には、もう一つの極めて緊切な問題、即ち黨の合同に關する問題に就いて檢討しよう。

社會民主々義的勞働者の絕對多數が、黨の分裂には極度に不滿を抱き、合同を要求してゐると云ふことは、何人にも公然たる事實である。又分裂が、社會民主々義的勞働者（或は社會民主々義者たらんとしてゐる勞働者）の、社會民主黨に對する、或る程度の冷淡化を呼び起したと云ふことも公然たる事實である。

黨の『上部』が、自身で合同すると云ふことに對しては、勞働者は、殆んど希望を失つた。合同の必要は、ロシア社會民主勞働黨第三回大會及び本年五月の

メンシェヴィキ會議で正式に認められた。その時から半年は經たが、合同の仕事は殆んど進まない。勞働者が我慢出來なくなつたのも不思議はない。『イースクラ』と『多數派』に依つて發行された小冊子(『黨の合同に就ての勞働者』一九〇五年中央委員會發行)で合同に就て意見を述べた『多數中の一人の勞働者』が、遂に、『下からの拳骨』で社會民主々義的インテリゲンチャを威嚇したのも不思議はない。一方の社會民主々義者(メンシェヴィキ)には、當時この威嚇は、好かれなかつたが、他の人々(ボリシェヴィキ)は、之を合法だと認め、根本に於て全く正當であつたことを發見した。

自覺した社會民主々義的勞働者が、自分の企畫(敢て『威嚇』とは云はない、何故なら此の言葉は、問責とデマゴーギアの響がする。我等は全力を盡して此等から逃れねばならないのだから)を實現することが出來、又實現せねばならないような時期が來たように私には思はれる。言葉の上ではなく事實に於て、

華麗な空辭ではなく、眞に黨の關係を刷新し、擴大し、强固にする新しい端初として、選擧の試みを、黨組織に適用し得る時期が、事實に於て、現在兎に角到來した。又到來しつつある。『多數派』は、中央委員會の形に於て、選擧の試みを、速かに適用實施すべきことを直接に承認した。少數派も同じような道を辿つてゐる。そして社會民主々義的勞働者は、凡ゆる社會民主々義的組織や機關や集會や會合に於て、偉大な壓倒的多數を形成しつつある。

要之、合同を說得し、合同の約束を獲得するのみならず、それかこれかのフラクションに於て、組織勞働者の多數が、單に決議することに依つて事實合同し得る可能性が、今や眼前に現れて來たのである。そこには何等の『强制』も存在しない。何故なら、合同の必要は、原則に於て、凡ゆる人々に承認され、勞働者は只原則的に解決された問題を、實踐上に解決すべき必要に迫られてゐるのであるから。

社會民主々義的勞働運動に於けるインテリゲンチヤとプロレタリアートの仕事の關係は、恐らく、次の一般的公式に依つて正確に表現され得るであらう。即ち、インテリゲンチアは、問題を、原則的に良く解決し、設計圖を良く畫き、何を爲すべきかの必要に就て良く判斷し、勞働者は、行動し、漠然たる灰色の理論を、生活の實踐に充てはめて之を造りかへるのである。

我々は今、大會や會議で、黨の合同に關する『灰色の理論』を作つたと、云ふにしても、私は、少しも、デマゴーグには陷らないであらう。勞働運動に於ける偉大なる自覺の役割を斷じて低下せしめないであらう。マルクス主義的理論と、マルクス主義的原則の偉大なる意義を弱めないであらう。勞働者の同志諸君！　この灰色の理論を、生活の實踐に充てはめて作りかへることに、我々を援助せよ！　莫大な數を以て、黨の組織に參加せよ。我等の第四回大會及メンシェヴィキの第二回會議を、社會民主的勞働者の意氣を鼓舞するような壯大な大

會たらしめよ。我々と共に、實踐的に合同の問題を審議せよ——此の問題に於ては、例外の形で（此は、通常、規約が確認するような例外である！）理論を十分の一とし、實踐を十分の九とせよ。實際、斯かる希望は、合法的であり、歷史的には必要であり、心理的には理解出來るものである。我々は亡命の雰圍氣の中で、あんなに長い間理論を唱へてゐたのである。（時には何を隱そう、全くつまらなく、何の役にも立たなかつたのに）だからして本當に今少しばかり、『弓をば反對の側に曲げて』そして實踐を少し多く前に進めるのは差支へないことである。分裂の原因と關聯して、おびたゞしくインキと紙を費やしたところの合同の問題——この問題に於ては、斯かる方法は、勿論、適當してゐる。特に我々亡命者は、實踐がしたくて腕が鳴つてゐた。そこで我々は、凡ゆる民主々義的××の非常に良い、完全な綱領を書いた。此の××の仕事のために合同を與へよ。

カデート化しつゝある社會民主々義との鬪爭と黨の訓練

しつゝあるカデート化社會民主々義との鬪爭と黨の訓練

はしがき

十九世紀の終りより二十世紀への初めにかけて、ロシアの自由主義的ブルジョアジーは、專制政治をその主要なる敵としてゐたが、一九〇三年南露のストライキやロストフ事件を契機として勞働者が、指導階級の自覺を以て立ちあがるや、自由主義者は、二つの戰線に對して、即ちツアーリズムに對してのみならず、勞働者に對しても亦鬪爭を開始するに至つた。

この新しい關係を看破したレーニンは、「そうだ、我々はツアーに對して自由主義者を利用するが、然し乍ら同時に我々は勞働者階級に對して言はなければならない、自由主義的ブルジョアジーが自己を組織し、自身の黨を作り、そして益々反革命的となり、勞働者に向つて、又××の決定的途行に向つて前進して來るであらうと云ふことを。それ故に我々は、ブルジョアジーがツアーに向つて前進する限りは彼等を援助するが、此の階級は我々の敵であることを忘れてはならな

い」と言明した。

その後一九〇五年以後に至り、自由主義者は益ゝ反動化し、勞働者階級の中に大いなる自己の敵を發見した。然るにメンシエウイキは、斯かる自由主義の反動化に全く盲目で、恰度、一九〇六年、第一國會（デユーマ）の選擧に於けるカデット（立憲民主黨）――自由主義的ブルジョアジーの黨――の勝利に陶醉してしまつた。「ロシアに新時代が始つた、立憲民主黨の勝利は我等の雄想を裏切らず、土地問題その他多くの根本問題の解決に就て國家に貢獻するであらう。」……感激の余り「カデート化しつつある」メンシエウイキは斯く叫んで、獨斷でカデートとのブロックさへ容認した。

レーニンは猛然として起つて、メンシエウイキに挑戰した。ボリシエウイキが一九〇五年後の三年間に遭遇した異常な危機に於て、メンシエウイキと抗爭を續けることは如何に困難であつたらう。本篇及次の一篇は、この危機に際し、黨の行動の統一、黨の訓練、黨員と黨機關との相互關係を全面的に考察した有益な文字である。（譯　者）

立憲民主（カデー）々義者（ト）とのブロックを認容したことは、勞働者黨の日和見派としてのメンシェウィキの樣相を、究局に於て、規定した。カデートとのブロックに抗爭

して、我々は、最も廣汎な、最も果敢な理論鬪爭を展開する。又展開せねばならない。此の鬪爭は、我々の獨立した（單に言葉だけではなく、事實に於て、即ちカデートとのブロックを作らずに）選擧戰に於いて、自己の階級的自覺の發達のため新しい材料を受くるであらうところの、××的プロレタリアートの大衆を、最もよく敎育し、結合せしむるものである。

この果敢なる理論鬪爭とプロレタリアートの黨の訓練とを如何にして結び付けるかと云ふ問題が起る。この問題は、××的社會民主々義の實踐的政策に於て、何等の誤解や動搖がないように、直接に提起され、直ぐに完全に說明される必要がある。

この問題の最初は原則的方面を、次には一切の人々に直接關係してゐる方面を、檢討して見よう。勞働者黨に於ける訓練の意義及訓練の概念に對する我々の見解は、原則的には、既に再三規定されたところである。行動の統一、審議

と批判の自由——これが我々の規定である。斯かる訓練のみが、前衛階級の民主々義的黨の獲得し得可きものである。勞働者階級の力は——組織である。大衆の組織がなければプロレタリアートは——無である。組織されたプロレタリアート——此が凡てである。組織は、行動の統一、實踐的進出の統一を意味する。然し、勿論凡ゆる意味の行動、進出は、それが、前方に進出し、後方に退却しない限りに於て——それが理論的に、プロレタリアートを昂揚せしめ、彼等を低下せしめず、墮落せしめず、力を弱めずに、彼等を結束する限りに於てのみ、價値がある。理論のない組織は——無意味である。それは實踐に於て、勞働者を、有産ブルジョアジーの權力に對する哀れな追隨者に變質せしめる。それ故、プロレタリアートは審議と批判の自由なしに、行動の統一を認めない。それ故自覺した勞働者は、一切の組織關係の破壞を必然的ならしむるところの、由々しき原則の破壞が屢々あると云ふことを、決して忘れてはならない。

誰か文筆の士が、私の言葉を誤解しないように、私は、直ちに、問題の一般的提起より、具體的提起に移らう。カデートとの社會民主々義的ブロックを認容することは、組織關係の完全な破壞、即ち分裂を要求しないであらうか？　我々は、否と思ふ。ボリシヴィキ全部がそう思つてゐる。第一に、メンシェヴィキは、實踐的な便宜主義の道程に立つたばかりであり、基礎も弱く、信念も薄い。それを以てマルトフが、—未だジェネヴァからカデートの暗號を與へられなかつた時、カデートのチエレバーニンとの既に認められたブロックを拒絶する意味の、拒絶書を書いた、そのインキが未だ盡きなかつた。等二に——これはもつと非常に重大なことであるが——ロシアに於けるプロレタリアートの現代の闘爭の客觀的狀勢は、それが打ち難き力を以て規定された決定的一歩へ突進して行きつつある。革命が大なる昂揚へと進むか、(我々が考へた如く)或は完全な沒落の道を辿るか、(ある社會民主々義者が、それを云ふことを恐れつつもそう思

つてゐるように）――兩方の場合に於て、カデートとのブロックの戰術は、不可避的に消散して塵となるであらう、それも余り遠くない將來に於て。インテリゲンチャ的の神經質に陷らず、我々は、それ故、××的プロレタリアートの持久力と健全なる階級的本能に期待をかけつつ、黨の統一性を保持する義務を持つのである。最後に第三には現在の選擧戰に於て、ブロックのために作られたメンシェヴィキと中央委員會の決定は、地方的組織をお互に結び付けず、又凡ゆる我々の黨を全體として、此のカデートとのブロックの恥づべき戰術に無理矢理に押つけはしない。

次には問題の具體的提起に就て述べよう。ロシア社會民主勞働黨全露會議の決定と中央委員會の指令は如何なる程度に於て、拘束力を持つてゐるか――そして如何なる程度に、黨の地方組織は、自治的であるか？

此の問題は、若し會議自身が之を解決しなかつたならば、我黨内に於て、は

てしない論爭を惹起したであらう。會議の凡ゆる委員は、會議が――評議機關で、決議機關でない故を以て、その決定は、拘束力を持たず、何人をも拘束するものでないと云ふことに意見が一致してゐた。代議員は、民主的に選擧されたのではなく、只指定された組織から、指定された數だけ、集められたのである。それ故、ボリシェヴィキ、レット人、ポーランド人は、會議に於て、時を移さず、ブロックに關するメンシェヴィキの決議の實行を要求し、彼等との仲直りを企畫しなかつた。（それは君主制ブルジョアジーとのブロックを容認すると同時に、ボイコットを正當と承認するが如きものである）そして、直接反對に、自己の政綱、自己の合言葉、選擧戰の自己の戰術を掲げた。即ちボリシェヴィキの斯かる行爲は、評議的會議の席上では勿論必要であつた。會議は、大會に代位するのではなく、はなく、之を準備せねばならなかつたのである――問題を解決するのではなく、もつと明瞭に正確に問題を提起せねばならなかつた――黨の内部の鬪爭を隱蔽

し、鬪爭を消滅させるのではなく、之を進め、もつと目的を持ち、もつと理論的なものたらしめねばならない。

先に進もう。會議の決定事項は——多少の變更をして——中央委員會の指令となつた。中央委員會の指令は、凡ゆる黨に對し拘束力を持つてゐる。當面の問題に就き、斯かる限度に於て、それは拘束力を持たないであらうか？

勿論、大會の決定事項の限度に於て、大會で承認された黨の地方團體の自治の限度に於て、それは拘束力を持つてゐる。若し、大會が、メンシェヴィキとボリシェヴィキ及中央委員達の承諾を得て、最も彈力性に富む決議の一つを採用しなかつたならば、この限度に就ての論爭は再び果しなきものとなり、解決も困難になり得たであらう。(何故なれば合同大會の決議は、選擧戰に於てブルジョア政黨との凡ゆるブロックを禁じてゐるから、此の決議の票決に際し、フラクション的な區劃の缺如してゐた事は——勞働者黨の統一と戰鬪能力の充實してゐ

る重要なる證據の一つである。

次に此の決議のテキストを示そう。

『會議は次の如き確信を公表する。即ち、同一の團體内に於て、凡ゆる團體員の間に、地方團體の資格を備へた機關に依つて採決された、選擧戰に關する一切の決定を、實施する義務を持つべきこと、中央委員會の一般的指令の限度内に於て、特に中央委員會は、地方的團體に、純粹に、社會民主々義者から成るのでない名簿の公覽を禁止することが出來る』こと。然し、『純粹に社會民主々義者から成るのではない名簿の公覽を彼等に義務づけてはならない』こと。

以上圈點を打つたことに依つて、果しのない論爭が起らなくなるのである。そして、恐らくは、望ましくない、危險な理論をも廢除する。中央委員會の一般指令は、カデートとのブロックを許さるべきものとして承認するが如き限度を越えることは出來ない。凡ゆる社會民主々義者は、これに際しフラクションの區

別なく、次の如く宣言した。即ちカデートとのブロックは何か非常に當を得たものだとは云ひ得ない。何故なら、我々の凡ては、ブロックの禁止を中央委員會に委任したが、ブロックを作れと命令しようとは思はないから。

結論は明かである——黨の前には二つの足場がある。一つは——會議の、メンシェヴィキとブンド派の十八名の代議員であり、他の一つは——ボリシェヴィキ、ポーランド人、レット人の十四名の代議員である。地方團體の資格ある機關は、此等のプラットホームを選擧し、形をかへ、補足し、新しいのにかへるのは自由である。當該機關の決議を待つて、我々黨員の全部は、一人の人として行動するのである。オデッサのボリシェヴィクは、若し彼の胸を惡くしたとしても、カデートの名のあるプリュッテンを芥箱の中にたたき込まねばならない。モスクワのメンシェヴィクは、彼の魂は、カデートを思つて惱んだとしても、社會民主々義者のみの名前のあるプリュテンを、芥箱の中にたたき込まねばならない。

然し選擧は、未だ明日のことではない。一切の××的社會民主々義者を益々固く結束せしめ、××を停止し、プロレタリアートの階級闘爭を弱め、大衆の市民的自覺を腐散せしむる、カデートとのブロックに抗して、最も廣汎な、最も果敢な理論闘爭を展開せしめよ！

一九〇七年に於けるペテルブルグの分派

一九〇七年に於けるペテルブルグの分派

ペテルブルグ團體の會議は、當面の最も重大なる政治的問題、即ち、國會選(ドゥーマ)擧の最初の段階に於て、カデートと協調すべきや否やに就て、最後の決定を爲さねばならなかつた。

ロシア社會民主勞働黨の組織は民主的である。このことは、黨の一切の仕事は直接に、或は代表者を經て爲され、一切の黨員は、何等の例外なく平等の權利を享受してゐると云ふことを意味してゐる。この際、一切の責任者、一切の指導的代議員、一切の黨機關は——選擧されるものであり、選擧人に對して責任を持つべきものであり、交代すべきものである。ペテルブルグ團體の仕事は、ロシア社會民主勞働黨の選擧されたペテルブルグ委員會が、處理する。ペテル

ブルグ團體の最高機關は、黨員の一切を(黨員は約六千)一緒に集めることの不可能のため、團體の代表者會議を以て、これに代へてゐる。この會議には、一切の團體員が、代表者を送る權利を持つてゐる。黨員の一定數に對して一人の代議員を——例へば、最近の會議に採用されたように、黨員五十名に對し代議員一名づつと云ふように代表者を送る權利を持つてゐる。此等の代表者は、一切の黨員に依つて選擧されねばならない。そこで代表者の決定は、一切の地方團體のために、問題の最高、究局の決定となるのである。

然しこれだけでは未だ全部ではない。問題の決定が、眞に民主的なものになるためには、團體の選擧された代表者を集めるだけでは不十分である。一切の團體員は、代表者を選擧すると同時に、獨立して、各自が各自のために、團體全部の利害に關する論爭題目に就ての意見を述べることが必要である。民主的な組織を持つ黨や團體は、例外なく、凡ての團體員の意見をたづねることを原

則として拒否することは出來ない——少くとも最も重大なる場合、特に、大衆が獨立して進出する場合、例へば、ストライキ、選擧、ある地方の大規模のボイコット等の如く、政治的行動に關する聲の起つてゐるような場合は、殊に然りである。

何故此の際、代表者を派遣することだけでは不十分だと云ふことが認められるのであらうか？　何故一切の黨員の意見をたづねること、或は所謂『全員の決定』が、要求されるのであるか？　それは即ち、大衆行動の成功のため、各自の勞働者の意識した自由意志による參加が必要だからである。各自の勞働者が罷業すべきか否か、カデートに投票すべきか否かと云ふ自分自身の問題を、全々意識的に、自由意志に依つて解決しなかつたならば、ストライキには、結束が固まらず、選擧は意識的に行はれることが出來ない。一切の政治問題を、一切の黨員の意見をきくことに依つて、解決することは不可能である。此は永遠

の疲憊した好果の擧らない選擧となつて了ふであらう。然し最も重要なる問題、特に大衆自身の行動の規定に直接關係ある問題は、民主化のために、代表者の派遣に依つてのみならず、一切の黨員の意見を質すことに依つて解決されねばならない。

これ即ちベテルブルグ委員會が、必ず會議への代議員選擧は、カデートとの協調を取決むべきであるかと云ふ問題を黨員に依つて審議した後に、一切の黨員に依つて此の問題を票決した後に、行はるると云ふことを規定したのである。選擧とは——それに大衆が直接參加するところの仕事である。××主義者は、大衆の自覺を、主要な力と認めてゐる。即ち、如何なる黨員でも、選擧に於てはカデートに投票すべきや否やの問題を意識的に解決せねばならない。そこに集つた一切の黨員に依つて、此の問題が公然と審議されてからのみ、各自に取つては、それやこれやの意識した強固な決定を爲すことが可能となつて來るの

である。斯かる決定に基いてのみ、會議への代表者の選出は、敎父や友情や習慣の仕事(我々は、然らば、我等のニコライ、ニコライウイチやイワン、イワーノウイチを選ばうと云ふようなではなく、『下層』自身に依る(即ち一切の黨員による)自分個人の政治的行動の(註)、自覺した規定をすることとなるのである。

註、ある人々は、代表者の選出は、選擧人が問題を實際に票決することをしないでも、代表者の特つ見解を知つてゐると云ふことに基礎を置くことが出來ると云つてゐる。然し、これは代表者の見解の一切を綜合した意味で云はるべきで、大衆自身の行動と關聯した一つの特別問題に就てば云はるべきでない。政綱の票決を拒絶することは(カデートとのブロックに贊成すべきや否や)斯かる條件の下に於ては、選擧人の見解の不明瞭、選擧人の不決斷、代表者との不完全な意見の一致を表明したものである。

國會への選擧、即ち全權者又は選擧人に對する最初の、基礎的な投票は、代表者の手を經ずに、個々に、各選擧人に依つて行はれねばならない。即ち、我々が、單に言葉だけではなく、事實に於て、眞に民主的な勞働者黨に組織され

た社會主義者たらんと欲するなら、我々は、各勞働者が、カデートに對して投票すべきや否やの問題を、自分自身に解明するように我々が努めねばならない。代表權を、自分の知つてゐるイワン、イワーノウイチや善人のシドロ・シドローウイチに委任するだけでは十分でない——『下層』に於ける論爭題目の本質を意識的に檢討せねばならない。その時に於てのみ、民主的決定は、大衆の意識した民主的決定となるであらう。『知合ひ』から選出された代表者の決定のみとはならないであらう。

ペテルブルグ委員會は、ペテルブルグ市及ペテルブルグ縣の一切の社會民主的團體の選ばれた指導者である。國會への選擧の如き仕事に於て、大衆を指導せんがためには、委員會は、(言葉のみではない民主化を認めるならば)凡ゆる大衆への選擧への意識的參加を獲得せねばならぬ義務があつた。凡ゆる大衆の選擧への參加が、意識的で、結束の固いものであるためには、そして又黨代表者

のみならず、各黨員が、ペテルブルグ委員會に確然たる返答を與へるがためには——各黨員は、カデートとの協調の側に立つべきであらうかどうか。

斯くの如きが『論爭』の、即ち代表者の選出前に於ける論爭題目そのものの審議の意義である。黨員の各集會に於ては、會議への代表者を選出する以前に、論爭すべき政治的題目を審議し、中央委員會からの報告者、即ち指導的な地方團體からの報告者の意見を聽取し、他の見解の共鳴者に意見を述べるの自由を與へることが必要である。この審議が、終つて後全黨員は、彼等がカデートとの協調に贊同するかどうかを投票するのである。投票を檢査する者は、兩派の代表者(この問題に就き團體內に二派があるとすれば)よりなる監督委員會である。斯かる條件を遵守することに依つてのみ、中央委員會は黨員の一切の大衆の意識的な意見を知り、從つて、大衆を盲目的にでなく指導し、大衆に依る問題の完全なる解明に依據することが出來る。

召還主義に抗して

『召還主義』の共鳴者及び擁護者の『政綱』に就て

召還主義に抗して

『召還主義』の共鳴者及び擁護者の『政綱』に就て

はしがき

一九〇五年の革命が失敗に終つてから、ロシア社會民主勞働黨には異常な困難が見舞つて來た。實際一九〇五年から一九〇八年に至る三年間は、社會民主黨がその全存在を通じて未だ經驗したことのない困苦時代であつた。

大衆の要望の下に、それ迄分裂してゐたメンシエウイキとボリシエウイキは一九〇六年兎も角ストックホルムの黨合同大會で、表面上合同せざるを得なくなつた。その大會では一九〇五年の經驗に就て大いなる論爭が起つた。然し兩派の意見の非常な相異は、ボリシエウイキとメンシエウイキを和合せしめることが出來ず、現實には二個の別々のフラクションが黨内に存在を續けることになつた。それよりメンシエウイキ支配のかなり長い時代が續きボリシエウイキ

は非常に危險な地位に立つた。

斯かる危險の裡に、第二國會は解散となり、ツアーの專制政府は、農民から選擧權を剝奪して、第三國會を招集せんとした。明白に反動組の議會たらんとする第三國會に參加すべきや否やの問題でボリシエヴイキの間に重大な意見の相違が始まつた。そして大多數は參加に反對し、國會のボイコットを主張した。

一部のボリシエヴイキは議會の代議士の召還を宣明した（ここから召還主義と云ふ言葉が起つたのである）。彼等の意見は、ツアーの議會は黑白人組（保守的反動派）の機關であつて、眞の革命家はそこに何等求むべきものがない。合法的可能性の利用は一般に不可能となつた、我々は速かに議會から手を引かればならないと云ふのである。

然しレーニンは、非常に少數の贊成者と共に斷然と第三國會參加を主張し、彼のどえらい權威に依つて、參加に決定し、それに若干の代議士を送ることに成功した。レーニンは、召還主義の思想は、一見正當にして革命的に見えるが、實際には大衆を生々とした現實より引離さんとするものであることを指摘した。

木篇は、レーニンが彼等の謬見を痛烈に論駁した名高い論文である。（譯　者）

最近團體『フペリョード』（前進）の發行により、パリから『黨の現狀と任務、ボリシェヴィキ團體に依り作成された政綱』と云ふ小冊子が出版された。フペリ

ョード團體とは——『プロレタリア』紙の擴大編輯會議が、本年の春、それに依つて新しいフラクションの組織を宣明したところの、そのボリシェヴィキの團體である。現在この團體は、『黨員十五名——勞働者七名とインテリゲンチャ八名』より成り（團體からの報告によれば）、自己特別の『政綱』の完全な、組織的な、積極的な叙述の企を以て進出してゐる。この政綱のテキストには用心深く、多數の人が集つて深慮した仕上げの跡が明瞭に看取される。この仕上げは、一切の荒削りなところを滑かにし、尖つた角を削ると云ふことに向けられ、團體と黨が分離すると云ふ點よりも團體と黨が接近すると云ふ點を强調してゐる。新政綱は一定の流れの見解を、公式に叙述したものとして、我々に取つては益々貴重なものである。ボルシェヴィキ團體は、最初は、彼等が如何に、『我が國の當面の歷史的狀勢を理解する』（第一章、三頁—一三頁）やを、次に彼等が如何に『ボリシェヴィズムを理解する』やを（第二章、一三—一七頁）叙述してゐる。而も彼等は、そ

の何れに對しても良く理解してゐない。

第一の問題を取上げよう。ボリシェヴィキの見解は、(そして黨の見解は)當面の瞬間に關する一九〇八年十二月の大會の決議の中に叙述されてゐる。新政綱の作者は、この決議中に表現されてゐる見解を抱いてゐるのであらうか？ 若しそうだとすれば、何故に彼等は直接此の事を云はないであらうか？ 若しそうなら、何のために特別の政綱を作成する必要があつたか？ 何のために瞬間に對する自己の『特別』の理解を叙述する必要があつたであらうか？ 若しそうでないとすれば、新團體は黨の見解と對立してゐる點は何にあるかを何故明瞭に云はないのであるか？

問題は新しい團體自身に取つて、大會の決議の意義が明かでない點にある。新團體は、無意識的に(或は半ば、無意識的に)、此の決議とは和解し得ないところの召還主義者の見解に人々を引き入れようとしてゐる。新團體は、小冊子

の中で、此の決議の一切の原則を通俗的(ポピュラー)に解説したのではなく、その一部分のみの通俗的な解説を與へてゐる、……他の部分は理解しないで。(恐らくその意義にさへ氣附かないかも知れない)。一九〇五年の革命を惹起した基礎的要因は今も活動を續けてゐる——と決議は云ふ。新しい××的危機は、成熟しつつある(第六項)。闘爭の目標は、ツアーリズムの××と共和國の獲得と云ふ點に置かれてある。プロレタリアートは、闘爭に於て『指導的役割』を演じ、政治的『××』の『獲得』に向つて努力せねばならない(第五項、第十項)。世界市場と世界政策の條件は、『國際的情勢を一層××的ならしむる』(第六項)新政綱は、即ち此等の規定を通俗的に説明してゐる、そしてその政綱が全くボリシェヴィキと黨とに提携して行く限り、その限りに於て政綱の叙述してゐる見解は正しく、その爲してゐる仕事は有益なのである。

然し禍は、此のその限りにと云ふ點を強調せねばならないところにある。新

團體は、此の決議の他の原則を理解せず、此の原則と他の原則との關係を理解せず、特に此の決議が、召還主義と和解し難い關係を持つてゐると云ふことを——此の關係はボリシェヴィキに取つては特有なものだが、新團體には特有なものではない——理解しないと云ふ點に、禍がある。

××は更に不可避的なものとなる。××は專制支配を××に導き、遂に之を××し終らねばならないと——新政綱の作者は云つてゐる。それはその通りだ。然し、これは現在の革命家、即ち社會民主々義者が、知り理解せねばならないところの凡てではない。彼は、此の××が、新しいしかたで、我々に近づきつつあること、我々は、それに向つて、新しいしかたで近づかねばならないこと（從來とは別に、從來のようであるのみならず、從來の如き鬪爭の武器と手段を以てのみならず）專制支配自身も從來の如きものではないと云ふことを理解し得るようにならねばならない。然し此の事をば、召還主義の擁護者達は、

見ることを欲しないのだ！　彼等は、頑强に一面的に止まることを欲し、これに依つて、自分の意識に反し、自分の意識とは獨立に、彼等は便宜主義者や清算派に御用を勤めてゐる。彼等は、一方への偏狹性を以て、他方への偏狹性を支持してゐる。

專制政治は、新しい歷史的圈內に入つた。それは、ブルジョア君主制支配に變化すべく第一歩を踏み出してゐる。第三國會は、一定の階級との同盟である。第三國會は、偶然の機關ではない、それは、此の新しい君主制組織に於ける必然な機關である。專政政治の新農業政策は、同じく偶然ではない。それは必然な、ブルジョア的に必然な、自己のブルジョア性に於て、新しいツアーリズムの政策に必然な構成的一環である。我々の前には、新しい××の誕生の特殊の條件を持つた特殊の歷史的圈が到來した。若し從來の方法のみに依つて、活動するならば、國會の壇上そのものを利用し得ないならば、我々は此の特殊性を獲

得し、新しい××への準備を整へることが出來ない。

而も召還主義者達には、此の今述べた原則を理解することが出來ないのだ。そしてこの原則を『合法的陰影』（小册子二八頁）だと宣言した召還主義の擁護者は、今日迄、この原則と完全な思念の全體との關係、この原則と當面の瞬間の特殊性の認識との關係、此の特殊性を自己の戰術中に數へ入れる努力との關係を理解することが出來ないのだ！　彼等は、我々は『革命と革命間の期間』を過程してゐるのだと繰返してゐる（三二頁）。然し何處にこの『過渡』の特殊性があるかを彼等は理解することが出來ない。そして、此の過渡を理解せずしては、××のための利益を以て、この過渡を過程することは出來ない、新しい××への準備をすることが出來ない。第二の波に移り行くことは出來ない。何故なら、新しい××への準備は、××が不可避的であると云ふ繰言を云ふだけに限つてはならない。その準備は、此の過渡的狀勢の特殊性を考慮に入れつつ宣傳、×

×、組織を以て構成されねばならない。

人々が如何に、過渡的狀勢に就て語り、何處に此の過渡の所在があるかを理解しない例が此處にある。『ロシアには眞の憲法が何等存在してゐないと云ふことと、而も國會（デューマ）は——權力も意義もない、憲法の幻影に過ぎないと云ふことは、人民の大衆が經驗に依つて、良く知つてゐるのみならず、今や全世界に取つて明かな事實となりつつある』（二一頁）之と、十二月革命に依つての第三國會に對する次の評價とを比較して見よ『六月三日の政變と第三國會の設置に依つて、黑百人的（反動的）地主と商工ブルジョアジー巨頭とツアーリズムとの同盟は公然と認められ、强固になつた』。

一年の間に黨の機關紙上で、決議は千樣にも、反芻咀嚼されたが、政綱の作者は、依然として決議を理解しなかつたと云ふことは、『全世界に明瞭』でないであらうか？　彼等は決議を理解し得なかつたのは自己の無理解性の爲ではな

く、召還主義と召還主義的思想が彼等を壓迫してゐたが爲であつたと云ふことを理解しなかつたからだ。

我々の第三國會は、黑百人的な十月派的な國會である。ロシアの十月派と黑百人組は『權力と意義』を有しないと云ふのは（政綱の作者が述べた如く）――愚の極みである。國家權力が、一般民族的規模に於て、一般國家的意義を有する公然と活動してゐる機關に於て、或る階級の反革命的同盟を組織し得ざるを得なくなつた時に、そして又一方には或る階級がツアーリズムに協調するところの反革命的ブロックに、それ自身、下から結成される時に於て、『眞の憲法の缺如』や國家權力が完全に專制政府の側に保持されてゐると云ふ事は、特殊な歷史的狀態を決して除外するものではない。若し、此等の階級とツアーリズムとの同盟（權力と收入を農奴制主張者たる地主の方に保持せんと努める同盟）が、當面の過渡期に於ける階級の支配の、徒黨を持つた皇帝（ツアー）支配の特殊的形態であ

るならば、そして又『革命の第一波』が打ち破られる條件の下で、國のブルジョア的進化に依つて生るべき形態であるならば――その時は××の壇上を利用せずして過渡期を利用するなど云ふことは夢想だも出來ないことである。反革命家達がその上から語るところのその國會の壇上を、我々が××準備の目的を以て利用することの特殊の戰術は――その時は、一切の歷史的狀勢の特殊性から流出する、義務的な戰術となる。國會が、『權力と意義のない』憲法の幻影に過ぎないならば、その時はブルジョア的ロシアの、ブルジョア的君主制の發達に於て、上流階級の支配の形態の發達等に於て、新しい段階と云ふものが一つもないことになる。若しそんな時があれば召還主義者達は、勿論原則的に正しいものとならう。

我々が引用した政綱の章句は、偶然の言ひ誤りであると思つてはならない。『國會に就て』（二五―二八頁）と云ふ特別の章の中にも、最初から次のような句に

出くわすのである。『一切の國會は、今日まで、現實の力と權力を有しない、そして一國の力の眞の相互關係を表はさない機關となつてゐた。政府は、一面からは、大衆の覺醒を直接の闘爭の道から、平和な選擧の道へと運び去り、他面からは、××との闘爭に於て政持を支持し得るが如き社會的團體と、此等の國會で取引するために民衆運動の攻擊の下に、國會を招集した』……此は――混亂した思想か、或は思想の斷片の寄せ集めに過ぎない。政府が、反革命的階級と取引するために國會を招集したなら、第一及び第二の國會は『力と權力』を持たず(××を援助するために)、第三の國會は、それを持つたし、現に持つてゐる(反革命を援助するために)と云ふ事實が、丁度此處から生れて來る。革命家達は、××を援助するに無力であつた機關に關係しないことが出來た(ある一定の條件の下では關係してはならなかつた)。これには議論はない。革命時代の斯かる機關を『××と革命間の時期』に於ける國會――それは反革命を援助

する力を持つ――と一緒にしつつ、政綱の作者は、非常な誤謬を犯してゐる。彼等は、その判斷を事實に於て適用されないような場合にも、正しいボリシェヴィキの判斷を適用するのである！　これは即ちボリシェヴィズムを戯畫化することを意味する。

ボリシェヴィズムの『理解』を約しつつ、政綱の作者は、特別な第四項(第一六頁)の如き結論さへ引出した。其處で、此の『戯畫化』された革命性は、古典的表現を發見したと云ひ得る。此の項の全部を示せば次の如くである。

『第四項、××の完成される迄は、勞働者階級の闘爭の半合法的及合法的手段と方法――その中には國會への參加も含めて――は獨立な決定的意義を有し得ず、單に直接××的な、公然たる大衆的闘爭のために力を集中し準備する手段となるに過ぎない』。

『××の完成』後には、合法的な闘爭手段は――『その中には』議會主義も含め

て――獨立した決定的意義を有し得ると云ふ結論が出て來るのだ

これは正しくない。革命後にも、そんなことは出來ない。『フベリョード』派の政綱には、無意義なことが書かれてある。

更に、『××の完成される迄は』合法的、半合法的以外の、一切の闘爭手段、即ち一切の×××的闘爭手段は、獨立した決定的意義を有し得ると云ふ結論が出て來るのだ。

これは正しくない。『××の完成』後(例へば、非合法的な宣傳の小團體)も、『××の完成』前(例へば、敵からの資金の××、××手段に依る捕縛者の解放、間諜の××等)も、政綱のテキストに云はれてあるように『獨立の決定的意義を有し得ないが、只云々』と云ふような闘爭の非合的手段もある。

更に問ふなら、如何なる『××の完成』に就て此處では語られてゐるのであるか? 明かに社會主義的××の完成に就ではない。何故なら、その時は勞働者階

級の闘爭はなくなるであらう、一般に××と云ふものがなくなるであらうから。即ち此處ではブルジョア民主々義的××に就て述べられてゐるのである。今、政綱の作者が、ブルジョア的社會民主々義××の完成の下に、何を『理解』したかを調べて見よう。

概して云へば、此の術語の中には、二ッのものを理解することが出來る。廣義の意味に用うるなら、これはブルジョア革命の客觀的な歴史的任務の解決を意味する。その完成、即ちブルジョア革命を惹起せしむる力のある基礎そのものの廢止、ブルジョア革命の一切のサイクルの完成を意味する。この意味に於ては、例へばフランスのブルジョア民主々義革命は、漸く一八七一年(始まつたは一七八九年)に完成された。狹義に此の言葉を使用するなら、それは個々別々の革命を、即ちブルジョア革命の一つを、次の表現が御好みなら、舊制度に打擊を與へはするが、此を打擊し終らない、これに依つて次のブルジョア革命の土臺を××

しないような『波』の一つを、意味する。此の意味に於て、一八四八年のドイツ革命は、一八五〇年か五〇年代に於て『完成され』たが、六〇年代の革命的昂揚のための土臺はこれに依つて何等廢除されなかつた。一七八九年のフランス革命は、一七九四年に『完成された』が、これに依つて一八三〇年—一八四八年の革命のための土臺は、何等廢除されなかつたのである。

『××の完成される迄は』と云ふ政綱の言葉を廣狹何れの意味に解釋するにせよ——その言葉の中には何等の意味が見出されない。ロシアに於て可能なブルジョア革命の一切の時期の完成前に、革命的社會民主々義の戰術を今規定せんとするのは全く馬鹿氣てゐる云ふことには、何等議論の餘地がない。そして一九〇五年—一九〇七の革命的『波』、即ちロシアに於ける最初のブルジョア革命に際して、專制政治は、最初の革命の波に打克つた』(一二頁) と云ふことを、そして我々は『革命と革命間の』時期を、即ち『民主々義的革命の二つの波』の間を、

過程しつつあると云ふことを、政綱自身が承認せばならないのである。

『政綱』に於ける、此の果しない、出口のない混亂の根原が何處にあるのか？然り、それは政綱が召還主義の思想の圈内から少しも脱し得ず、その根本的誤謬を修正せず、この誤謬を認めさへもせずに、外交的に召還主義から分離せんとしつつあるがためである、それは『フペリョード派』に取つては、召還主義は『合法的陰影』であり、即ち彼等に取つては、戯畫化せるボリシェヴィズムの召還主義的陰影が法則であり、雛型であり、最も完全な雛型となつてゐるがためである。此の斜面に立つた者は、出口のない混亂の泥沼へと、止め場もなく陷りつつある者で、又今後も陷るであらう。彼等は適用の條件や意義の限度を考へ拔くことが出來ず、空言と合言葉を繰り返してゐる。

一九〇六年—一九〇七年にボリシェヴィキは、例へば便宜主義者に反對して、何故に、『革命は終らなかつた』と云ふ合言葉を揚げたのであるか？　それは客

觀的條件が、狹義の××の完成に就ては何も云ひ得ないような狀勢であつたから。せめて第二國會の時期を取上げて見よ。それは世界に於て最も革命的な議會、恐らく最も反動的な政府であつた。上からの政變又は下からの蜂起以外に此處からは直接の出口が恐らくなかつた。そして今、非常に賢い衒學者(ペダント)が如何に腦漿を絞つても政變前迄は何人も、政府が政變に成功するか、政變が穩かに濟むか、ニコライ二世が政變の際に×を挫かないであらうと云ふことを保證し得ないであらう。『革命は終らなかつた』と云ふ合言葉は、最も生々(なまなま)しい、直接に重大な、實踐的にはピリッと來るような意義を持つてゐる。何故なら此の合言葉のみが、問題は何であるか、事件の客觀的論理に依つて問題が何に向つて進んでゐるかを正確に表現したから。そして現在召還主義者自身が當面の狀態を、『革命と革命間の狀態』として認めてゐる時に於て、——『××の完成される迄に』——『××的翼の合法的陰影』として此の召還主義を認めんとする試みは—

—收拾すべからざる混亂でないであらうか？

此の矛盾の出口のない圈內から、逃れ出るためには、召還主義と外交辭令を交さずに、彼の思想的根據を截斷することが必要だ。即ち十二月革命の觀點に立ち、之を最後まで思考し拔くことが必要である。當面の、革命と革命間の時期は、偶然としては說明されない。我々の前には、專制支配の發展の特別の段階、ブルジョア的君主制の發展の特別の段階、ブルジョア的黑百人組的議會主義の段階、農村に於けるツアーリズムのブルジョア的政策の特別の段階、此等一切の反革命的ブルジョアジーの支持の特別の段階があると云ふ點に就ては、最早や一點の疑ひもない。此の時期は、疑もなく『××の二つの波の間の』過渡期である。然し、第二の××に備へんがためには、此の時期の特殊性を、(あるが儘に)把握することこそ、此の困難な、重苦しくして、暗黑だが、鬪爭の進行が我々に無理押しに押しつけてゐるこの過渡期に、自分の戰術と組織を適應せ

しめ得るようにすることこそ必要なのである。國會の壇上を利用することは、他の一切の合法的可能手段と等しく、非常に高度でない闘爭手段に屬すべきもので、何等『白熱性』を帶びてゐない。然し、過渡期は力の直接的な、決定的な進出でなく、力を準備し、力を集中することが特殊の任務であり、それ故に過渡期なのである。此の外部的の輝しさを失つた仕事をなすを得、黒百人組的な十月派的な國會の時期に特有な半公然たる機關を悉くこの爲に利用するを得、この土臺に立つて、××的社會民主々義の一切の傳統、その最近の英雄的過去の一切の合言葉、その仕事の一切の精神、便宜主義及改良主義に對する一切の不調和性を防衛し得ること――これが黨の任務であり、當面の任務である。

我々は、新政綱が、一九〇八年の十二月會議の決議で述べられた戰術から第一に退却してゐることを究明した。我々は、それは召還主義的思想への退却であり、過渡期のマルクス主義的分析とは、一般に××的社會民主々義者の戰術

の基礎的前提とは、何等の共通點を有しない、思想への退却であることを看取した。次に我々は、新政綱の第二の獨創的樣相を究明する必要がある。

これは――新團體に依つて宣言された『大衆の間に新しいプロレタリア文化を創造し、擴大すること、即ちプロレタリア科學を發達せしめ、プロレタリアートの間に、眞實な同志的關係を强め、プロレタリア哲學を建設し、藝術をプロレタリアの努力と經驗の方に向けしめる』と云ふ任務である。（第一七頁）

此處に、物の本質を蔽はんがため、新政綱でお役目を勤める素朴な外交の雛型がある！　『科學』と『哲學』の間に、『眞實なる同志的關係』を挿入する時は、これが素朴でないであらうか？　新團體は、政綱の中に、自分の豫想した侮辱を挿入し、眞實な『同志的關係』を破壞した罪を他團體（即ち、眞先に正統的なボリシェヴィキ）に歸せんとしてゐる。斯くの如きが此の滑稽な一項の現實的內容である。

『プロレタリア科學』は此處でも矢張り『悲しそうな　わざとらしい』顔をしてゐる。第一、我々は只一つのプロレタリア科學――マルクシズムを知るのみである。政綱の作者は至る所で『科學的社會主義』と云ふ言葉を揚げて（一三、一五、一六　二〇、二一頁）何故か組織的に、此の一の正確な術語の使用を避けるのであらうか。ロシアに於ては『科學的社會主義』と云ふ言葉は、マルクス主義の直接の反對者を意味する傾向のあるは明かである。第二に、若し政綱中に、『プロレタリア科學』の發達の任務を揚げるならば、當面如何なる思想的、理論的鬪爭を考慮に入るべきか、政綱の作者は、如何なる方向に立つべきかを、明確に述べる必要がある。此の點を默過したのは素朴的な狡猾さである。何故なら一九〇八年―一九〇九年の社會民主々義の文獻を知つてゐる者には如何なる者にでも、問題の本質は明瞭であるから。現代、科學、哲學、藝術の領域に於ては、マルクス主義者とマッハ主義者の鬪爭が重要なものとなつた。

此の誰れにでも解つてゐる事實に對し、眼を蔽はんとするは少くとも滑稽である。新政綱は、意見の相違を消滅せんがために書くことになる。

我が作者達は、ぎごちなくも、政綱の引用部分で、自分を曝露してゐる。凡ての人々に明かな如く事實『プロレタリア哲學』と云へば、マッハ主義のことと思はれてゐる――理論の解つた社會民主々義者なら誰でもこの新しい別名を發見するであらう。こんな別名を考へても何にもならないことであつた。この別名の後ろに隱れても何にもならないことである。事實に於て、新團體中の有力なる文筆家は、非マッハ主義の哲學を、非プロレタリア的だと考へるマッハ主義者達である。

斯くして若し、政綱の中で藝術のことを語りたかつたのなら、新團體は、哲學と藝術上の『非プロレタリ的』、即ち非マッハ主義的理論に挑戰する人々を結

合せしむると云ふことを、云ふ必要があつた。斯くしたならそれは凡ての人々に明かな思想的潮流の、直接な、正しい、公然の進出であり、他の思潮との闘爭への進出であつたらう。黨に取つて、重大なる意義が理論闘爭に與へられる時には即ち直接の宣戰布告を以て進出すべきで、逃げ隠れたりなどしてはならない。そして我々は、政綱中のマルクシズムとの哲學的闘爭の隠れた展開に際し、明瞭に規定された回答へと、凡ゆる人々を招集するであらう。事實に於て『プロレタリア文化』に關する凡ゆる章句は、マルクシズムとの闘爭を隠蔽してゐる。新團體の『獨創性』とは、彼が、哲學に於て、即ち如何なる流派を擁護するかを直接述べずに、黨の政綱に哲學を持ち込んだと云ふことである。

然し、政綱の引用章句の有する現實的内容が全々消極的であるとは云ひ得ないであらう。その後ろには若干の積極的内容が隠されてゐる。此の積極的内容はエム・ゴリキーの一語に依つて表現することが出來る。

エム・ゴリキーは、新團體の共鳴者だとブルジョア新聞がもう騒ぎ立てた（曲筆し歪曲して）と云ふ事實を隠したとて何もならない。その實ゴリキーは、——勿論プロレタリア藝術の爲に多くの仕事をなし、今後も爲し得るプロレタリア藝術の最も巨大なる代表者である。社會民主黨の如何なる分派も、それにゴリキーが、屬してゐると云ふことを誇り得るのは當然である。然しそれだからと云つて、政綱中に、『プロレタリア藝術』を挿入することは、此の政綱が貧弱だと云ふ證明を與へることを意味する。自分自身の『專横』を自ら曝露するところの文學者的小團體に自己の團體を變質せしめることを意味する。政綱の作者達は、權威者承認の反對論を盛んに云つてゐるが、直接に問題の所在を明かにしない。ボリシェヴィキ側の哲學上の唯物主義の主張と召還主義との闘爭は、マッハ主義の敵が、『盲目に』信頼してゐる——斯く作者達は云ふ——個々の權威者達の仕事（事情に對する微妙な暗示）であるかの如く彼等が思つてゐるところ

に問題が所在する。斯かる突飛な言動は勿論兒戯に類する。然しフペリ゛ード派はこの權威者に對して餘り良い關係を持つてゐない。ゴリキーはプロレタリア藝術の權威である、この事には論がない。此の權威者をマッハ主義と召還主義の强固のため利用せんと試みることは（勿論思想的の意味に於て）權威者に對しては斯く取扱つてはならないと云ふことの雛型を與へるものである。

プロレタリア藝術の仕事にかけては、エム・ゴリキーはマッハ主義や召還主義に同情してゐるとしても、偉大なるプラスである。社會民主々義的な藝術運動に於ては、黨内の召還主義者とマッハ主義者の團體を分離し、特別の團體の任務としてプロレタリア藝術の運動を進めんとする政綱はマイナスである。何故なら政綱は大なる權威者の仕事に於て、權威者の弱い方面を形造つてゐるものを、權威者がプロレタリアートにもたらした大きな利益額の中に負數として入つて來る丁度そのものを、强固にし利用せんと欲してゐるから。

昭和二年九月二十五日印刷
昭和二年九月二十八日發行

【定價金參拾錢】

譯者　竹尾弐

發行者　東京市芝區南佐久間町二ノ一八　藤岡淳吉

印刷者　東京市牛込區山吹町一九八番地　萩原芳雄

發行所　東京市芝區南佐久間町二ノ一八　振替東京七五二七九番　共生閣

關西發賣所　京都市上京區吉田下阿達町四〇　振替大阪八一五九三番　共生閣京都支店

315
216

レーニン著 原欣二譯 何から始むべきか 定價二十錢 送料二錢
ロゾフスキー著 福島一郎譯 前衞當面の任務 定價二十錢 送料二錢
ロゾフスキー著 吉山道三譯 レーニン 定價三十錢 送料四錢
ゴルブネル著 荒川實藏譯 レーニズムは如何にして學ぶべきか 定價二十錢 送料二錢
レーニン著 荒川實藏著 口に統一を叫び統一を亂すもの 定價三十五錢 送料四錢
エンゲルス著 吉山道三譯 史的唯物論に就て 定價三十錢 送料二錢
ヘーリン著 廣島定吉譯 辯證法的唯物論大要 定價三十錢 送料二錢
レーニン著 竹尾弐譯 組織問題に就て 定價三十錢 送料二錢
スターリン著 荒井眞次譯 トロツキーズムとレーニズム 定價三十錢 送料二錢
レーニン著 水野正次譯 婦人問題に就て 定價五十錢 送料四錢

終

¥. 30